

- 第2分科会 ① ネットワーク機能を活かした学校図書館支援の在り方  
発表者 小林 隆幸（千葉県袖ヶ浦市教育委員会 学校教育課 指導主事）  
② 駒ヶ根市における保育園と学校支援  
発表者 小川 清美（駒ヶ根市立図書館長）  
コーディネーター 宮下 明彦（長野県図書館協会副会長・常務理事・事務局長）

### 1 発表の概要

①袖ヶ浦市では「読書が好き！」と言える子どもの育成をめざして／“読書のまち そでがうら”の推進という基本理念をもとに家庭・地域、学校、図書館、行政が相互に連携して取り組む。「図書館を使った調べる学習コンクールへの参加率→70%」等の具体的な10項目以上の目標値を定め、子ども読書活動推進会議によって進捗状況が点検・評価される。市内の幼・保、子育てネットワーク、「学校図書館支援センター」を中心とした学校図書館ネットワーク、公共図書館5館・博物館の“人・もの・情報”を有機的に結びつけ、共有し協働しながら子供の読む・調べる習慣を確立するための試みを積極的に推進。学校図書館では特に子供達が主体的・意欲的に学習し、自ら学ぶ力や情報活用能力を育むための環境を整備している。学び方のスキルを系統的、段階的に整理した「小中学校学び方ガイド」を作成し、普通学級や学校図書館に配備。学習指導要領に基づいた各教科の学習内容に図書館活用、調べ学習を位置づけることを進めている。

②駒ヶ根市では「第二次子ども読書活動推進計画」に基づき児童サービスの充実を図っている。毎月第3水曜日を「家族読書の日」と定め周知普及し、読み聞かせや読書活動の推進と啓発を進める。保・幼への読書支援は、約50冊の絵本が入った箱が市内の全13園を毎月巡回する「よみーくちゃん巡回絵本事業」を行う。市内全小中学校と市立図書館はネットワーク化されており図書を相互に貸借ができる。学校司書と公共の司書は全員司書資格を保有、同一財団職員である。学校・公共の定例連絡会を年6回実施し、双方が連携し、学校間格差の是正や利用の促進を図る。

### 2 討議の概要

- ①篠原（大学非常勤）袖ヶ浦市で育った子どもと他の子との違いは？→読書好きな子が全国平均よりも多い。情操面の豊かさ、学力の向上、進学率の高さなどもうかがえる。  
②加藤（南箕輪西部保）家族読書はなぜ水曜日に実施か？→週末は家族が揃いにくいから。（駒）  
③小松（伊那東小）まなび方ガイドは実際に授業で活用されているのか→ワークシートとして活用しながら授業を進めている。（袖）  
④北原（安曇野中央）公共が「調べる学習コンクール」に向けてできることは？→調べ学習相談会やテーマに関連した図書紹介リストの作成。（袖）／学校との連携について本の貸出以外で公共としてできることは？→学校の規模により格差がある。違いを認識するために各校で同じことをする。学校司書は他校を見る機会が少ないので公共で橋渡しをする。その上で自校にあった支援を行うことを仲立ちし、他校とは違う個性を育てていく手助けをする。（袖）  
⑤村西（筑北村）ブックスタートなどの予算は公共の通常予算に含まれるのか？→特別枠で。（駒）  
⑥新津（中野西高）高校との連携は？→高校と小中校は“人”のつながりのみ。（袖）

### 3 まとめ

学校図書館は従来「読書センター」に終始していたが、現在は「学習センター」「情報センター」の役割が強く求められている。学習指導要領の改定によりアクティブ・ラーニングが注目されているが、調べる学習はその典型として位置づけられる。袖ヶ浦市で盛んになったのは「学校図書館支援センター」の存在が大きく、教委が舵取りをし複数機関で連携を取り進めている。県では茅野市が先進地域で、市の方針に定め予算化されている。また学校長が図書館長に任命され年間計画（目標）を提出し意識化が図られている。他にも県内3地域でモデル校を指定し、市を挙げて調べる学習を普及発展させたいが現場からは難しいとの声も上がっている。当面は公共図書館が学校図書館・学校教育をどのように支援・連携していくかという点が課題となる。